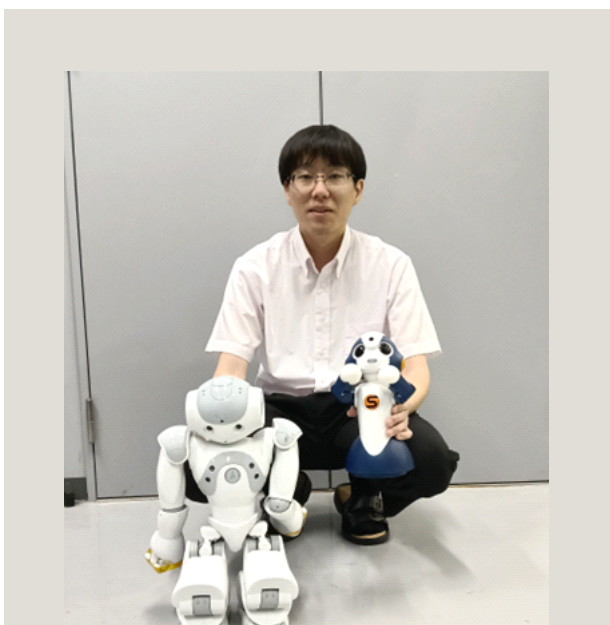


VALUE POINTER

## SCAT研究奨励金を受けて

今回は、令和4年度SCAT研究奨励金採用の坪倉 和哉さんをご紹介します。

坪倉さんは、令和8年3月愛知県立大学大学院情報科学研究科情報科学専攻博士課程を修了され、博士号を取得。現在は、愛知県立大学で教員としてご活躍されています。



坪倉 和哉 さん

Kazuya Tsubokura

愛知県立大学 情報科学部 助教

モットー：世のため人のためになる研究を

〈略歴〉

令和3年3月：愛知県立大学 情報科学部 卒業

令和5年3月：愛知県立大学 大学院情報科学研究科  
博士前期課程 修了

令和8年3月：愛知県立大学 大学院情報科学研究科  
博士後期課程 修了

令和8年4月-現在：愛知県立大学 情報科学部 助教

### Q. 在学中は何の研究をされていましたか？

在学中は、大きく二つのテーマに取り組んでいました。一つは、マルチモーダル情報を用いた認知症検出モデルの構築です。高齢者の会話音声を用いて、認知症を早期に検出する機械学習モデルの研究・開発を行いました。もう一つは、雑談対話システムの構築です。人と自然に会話できる対話システムを実現するため、特に「対話破綻の検出」と「対話破綻後の修復」に取り組みました。対話破綻とは、システムが不適切な応答を返すことで会話が成立しなくなる現象です。在学中は、破綻につながる発話を検出する技術と、破綻が生じた際に自然な形で会話を立て直す技術の研究を進めました。

### Q. 研究奨励金を受けて良かったことなどお聞かせください

最も大きかったのは、研究に集中できる環境を確保できたことです。研究奨励金のおかげで、ティーチングアシスタントや外部アルバイトに充てる時間を大幅に減らすことができ、その分、研究活動や学会発表、論文執筆により多くの時間を割くことができました。結果として、研究成果の創出や自身の成長につながったと感じています。

### Q. 現在の仕事を志望されたきっかけは

もともと人に教えることに興味がありました。また、大学教員の仕事には、自らの研究を進めるだけでなく、最先端の研究成果を、講義を通じて学生に還元できる魅力があります。さらに、学生とともに研究に取り組み、新しい知見を生み出していく過程に大きなやりがいを感じています。そのため、教育と研究の両方に携われる現在の仕事を志望しました。

### Q. 現在の仕事についてお聞かせください

現在は愛知県立大学で教員として勤務しています。「コンピュータリテラシ」や「メディアプレゼンテーション論」など、情報

科学の基礎を学ぶ講義を担当しており、学生が実践的なスキルを身に付けられるよう、演習を重視した授業づくりを心掛けています。また、研究活動にも取り組んでおり、在学時に行っていた対話システムや人工知能に関する研究を発展させながら、より実社会での活用を見据えた応用研究を進めています。

#### Q. 現在の仕事の魅力は何ですか

学生とともに学びを深めながら、社会に役立つ技術の研究・開発に取り組めることです。研究は一人で進めるものではなく、学生との議論を通じて新しいアイデアや気づきが生まれることも少なくありません。また、学生の成長を間近で見られることも大きな魅力です。教育と研究の両方に携わりながら、次世代の人材育成と新しい知識の創出に貢献できることにやりがいを感じています。

#### Q. 現在の仕事で苦勞されていることはありますか

大学教員の仕事は、研究だけでなく、講義の準備や学生の研究指導、学内外の業務など、多岐にわたる業務を並行して進める必要があります。そのため、限られた時間の中で優先順位を付けながら効率よく仕事を進めることが求められます。私自身、もともとマルチタスクが得意な方ではありませんが、日々試行錯誤しながら業務に取り組んでいます。こうした時間管理やスケジュール調整の能力は、大学教員に限らず、どのような仕事においても重要な力だと実感しています。

#### Q. 今、興味もっていることや趣味などお聞かせください

現在は、人間同士の会話の分析に興味を持っています。在学中にも会話コーパスの分析に取り組んでいましたが、当時は対話システムの研究が中心であり、人間同士の会話そのものを深く分析するところまでは十分にできていませんでした。私たちは普段何気なく会話をしていますが、その中には相手の意図を推測したり、曖昧な表現を補ったり、相手との関係性を考慮したりと、非常に複雑なやり取りが含まれています。現在は、そのような人間同士の会話の仕組みを明らかにし、人がどのように会話を成立させているのかをモデル化したいと考えています。そして、そこで得られた知見を人とシステムとの対話にも応用し、より自然で円滑なコミュニケーションが可能な対話システムの実現につなげたいと思っています。

また、趣味はライブに行くことです。ときどき好きなアーティストのライブに参加してリフレッシュしています。研究では人やシステムとのコミュニケーションを扱っていますが、ライブ会場で生まれる一体感や熱気にも、人と人をつなぐコミュニケーションの面白さを感じています。

#### Q. 将来の目標についてお聞かせください

これまで取り組んできた対話システムや会話分析に関する研究をさらに発展させ、社会に役立つ技術として還元していくことが目標です。近年、対話AIやコミュニケーション支援技術は急

速に発展していますが、人とシステムが本当の意味で自然に対話できるようになるためには、まだ多くの課題が残されています。私は研究を通じて、人々の生活を少しでも便利で豊かなものにし、誰もがより生きやすい社会の実現に貢献したいと考えています。また、大学教員として、研究成果を教育の場へ還元するとともに、学生とともに新しい知識や技術を創り出していくことも大切な目標の一つです。研究・教育・地域社会への貢献を通じて、社会に価値を提供できる研究者であり続けたいと思っています。